

■■ オコゼのこと ■■

一 羽前国西田川郡袖浦村大字十里塚は酒田港より西方一里半許りあり、半農半漁の生活をなせり。此近隣にては、浜で出でて漁をするに、時折網の目にオコゼの懸りて上る事あり、鱗に刺ある故取扱ひには厄介なれども、見付ければ捕へ干して貯へ置くと言へり。これは格別利用の途あるにあらず、山の神を祀る為の用意なり。山の神を祀るには、オコゼを最もよしとしたるなり。山師（杣木職の類）などの山に入りて、特別の形をせる木を尋ぬる事あり。例へば家屋のうつ梁などの適度に曲がりたるを求むる時など、山の神にオコゼを奉るとて願掛けをすれば、不思議に思ふやうなる木の見つかる言へり。其時は直ちに木を伐らず、先づ目印をなし置き、後向になりてオコゼを木に向かって投げつくるなり。而して後を見ずして還り来り、翌日行きて伐るなり。されば心掛けよき家庭にては年中オコゼを用意し置くとも言へり。又山中にて山の神を祀るに、オコゼを糸に吊るし、古木を撰み其枝に掛くる事もあり。最上川の西岸、袖浦村下割の田面中に榎しもわりの古木あり。山の神の木と称して、近隣の者オコゼを奉る風あり。乳の祈願或は産の祈りにて奉納せるオコゼの、糸に吊るしたるが枝に幾つとなく下がり居れりといふが、二三年前伐りたりとて、自分が尋ねし時は最早無かりし。大正一四年五月の事なり。

〔隅田川などにオコゼといい、魚の餌にするケムシあり。飛鳥山の運転手近藤君談〕

〔肥後上益城郡のオコゼ、藤岡のオコゼ、広島地方のオコゼ、長門のオコゼ、長州室積の潮見家〕

二 三河遠江の山地などにてオコゼと言へるは毛虫の事なり。遠江磐田郡竜山村辺にては、草色にて大さ一寸位あり猛毒あり、時に草と見分け難きため誤って刺さるゝなり、刺さるれば忽ち局部腫れ上り其為二三日位発熱する事ありと言へり。引佐郡渋川付近にて言へるは、毛の色黒くして長く猛毒ありて木の枝に居る事もあり、時に人の通りかかるを見て落下し来り刺すなど言へり。三河南設楽郡などにては、毛の色黄にして深く、大なるは長さ二寸以上ありて猛毒あり、多く草叢に居ると言ひ、これにてハヤ、天の魚を釣れば、不思議によく釣れるといふ。又川岸の草の葉などにオコゼの止り居れば、魚の水面より跳び上りてとり食ふと言へり。而して山の神との関係は更に言はぬやうなり。

追記 自分たちが少年の頃には、山中の朽木の株などにいる細長い貝（南方さんの言われるキセル貝か）を、持っていれば運が良くなるというて探し出して、紙に包んで兵児帯の間などへ入れておいたものであった。長篠の小学校の裏山などには、

ことにたくさんあった。名ははっきり覚えていないが、オコゼと言ったように思う。

別にオコゼという毛虫があった。黄色の毛深い、長さ二、三寸くらいもあるものであった。刺すことが最も劇しいと言って怖れたものであったが、川にいるアメノウオ、マス、ウグイなど、このオコゼを見れば（川岸の木などにいるものを）三尺も飛び上がって必ずとらねばおかぬほど、好物であるというが、それでいて、人間が釣りをする餌にしたのでは決して喰わぬというた。